

# 『ラストゲーム ～最後の早慶戦～』

## 第一稿

羽原大介

### 早稲田野球部グループ

相本芳彦……早大4年。早稲田野球部マネージャー。

笠井和也……早大4年。主将。相本の親友。

近松清一……早大4年。副将。愛国心溢れる学生。

岡島忠之……早大3年。ピッチャー。肺に持病を持つ。

伴東勇介……早大3年。キャッチャー。チーム一の大食漢。

金本明夫……早大1年。

壺谷健一……早大1年。

### 慶応野球部グループ

阪下誠司……慶大4年。主将。

別府豊……慶大4年。六大学の主砲と呼ばれた4番打者。

山川昭光……慶大1年。

田所富士夫……慶大1年。

### その他の人物

相本信一郎記者（ワセダと二役）……相本の兄。毎朝新聞社の記者。

児島大佐……陸軍兵務課長。

荒木田……児玉の部下の帝国軍人。陸軍兵務課。

飛島先生……早大野球部顧問。「二球入魂」という言葉の生みの親。

那須野秀樹……早稲田の応援部・部長。

若い記者……毎朝新聞の記者、信一郎の部下。

### 現代パートの人物

ハンドルネーム・ワセダ……早稲田の学生。自殺志願の男。

ハンドルネーム・ケイオー……慶応の学生。興味本位で自殺サイトにアクセスした男。

波の音が聞こえる別荘の書斎、書棚には古い本がたくさんある。今は空き家となっている亡くなったワセダの祖父の家である。

自殺サイトで知り合った男と一緒に死ぬため、ワセダが一人待っている。待ち合わせの男がなかなか来ない、パソコンで待ち合わせ時間を間違いないと確認し、「遅いな……」と呟くと、窓の外を眺める。

ワセダ「来た！」

居ずまいを正し、恋人を待つような気分でドアを開けると、もう一人の男、ケイオーが挙動不審に入ってくる。

ワセダ「はじめまして、お待ちしてました！」

ケイオー「……（一旦目を合わすが、すぐに逸らし、室内をうろろ歩き回り落ち着かない）」

ワセダ「……あの、ハンドルネーム・ケイオー、さん、ですよね？」

ケイオー「……」

ワセダ「ボク、ハンドルネーム・ワセダです！いや、約束の時間過ぎてもらっしやらないから、ひよっとしてドタキャンされちゃったかな、なんてドキドキしてました」

ケイオー「（見回しながら）……、キミン家？」

ワセダ「去年亡くなった爺ちゃんの別荘で、今は空き家です。もちろん誰もいません。

どうです？最高の場所でしょ？」

ケイオー「……最高の場所？」

ワセダ「……自殺するには」

ケイオー「……」

ワセダ「さてと、じゃさっそく……、死にますか」

ケイオー「……もう？」

ワセダ「だって、その為に集まったわけですから。そうでしょ？我々は、自殺サイトで知り合い、一緒に自殺する為にここで待ち合わせた。互いの動機は一切聞かない。自殺方法は会ってから決める。そういう約束でしたよね」

ケイオー「……（ちよつと怯えた感じで、小刻みに頷く）」

ワセダ「短い付き合いになると思いますけど、最後までどうぞよろしくお願いします」

ケイオー「（何とか話題を変えようと、書棚の分厚い本を手に）……お爺さん、どんな人

だったの？」

ワセダ「新聞記者だったそうです。戦時中は、大本営発表の提灯記事を。戦争が終わってからは、ずっとスポーツ関係の記事を書いてたって。もつとも俺はほとんど会ったことないから、実際に爺さんから聞いたわけじゃないですけど。……そんな話してもしょうがないですよね。さて、どうやって死にますか、一応、いろいろ用意してみたんですけど、（バッグをこそこそ漁り、輪っか状のロープを取り出す）ここはオーソドックスに、自殺の王道・首吊りにします？」

ケイオー「（半ビビリで）く、首吊り!?!」

ワセダ、実際の椅子など使って実演しながら死に方を説明し、

ワセダ「この台に乗って、鴨居にしっかりとロープを固定し、こうして首を通して、台を蹴る！」

ケイオー「恐怖で」ワッ！」

ワセダ、ロープの輪っかを首に引っ掛け、迫真の演技で苦しそうな顔。

ワセダ「喉が絞まって、呼吸困難に陥ると同時に、頸動脈が圧迫されて脳に血液が行かなくなり、30秒ほどで意識がなくなり、やがて……窒息死。一般的な死に方の中では一番失敗する確率も少なく、苦しまずに死ねると言われています。何しろ死刑にも、この死に方が採用されてるわけですからね」

ケイオー「……（小刻みに震えている）」

ワセダ「ただし死体の発見が遅れた場合、体中の穴という穴が全て開き、涙も……、鼻水も……、ヨダレも……、もちろん糞尿も全て垂れ流しの惨めな状態になってしまうそうです」

ケイオー「……イヤだ、そんな死に方絶対イヤだ」

ワセダ「……首吊りはやめましょう」

ワセダ、再度バッグを漁り、カッターナイフを取り出す。

ワセダ「リストカットはどうです？」

ケイオー「リストカット？」

ワセダ「湯船にお湯を溜め、お湯を流しっぱなしにして、このカッターナイフで手首と、念の為に首筋の動脈をグサッ！……透明なお湯に赤黒い血が流れ出し、やがて赤く染まったお湯が浴槽から溢れ、渦を巻いて排水口に吸い込まれていく……うまく行けば、出血性ショック死ってやつで、あつという間に死ぬこともあるそうです」

ケイオー「……イヤだ、そんなお風呂入りたくない」

ワセダ「……そうですよね、赤いお湯のお風呂なんて気持ち悪いですもんね。お風呂はやっぱり、無色透明ですよ」

ケイオー「バスクリン」

ワセダ「え？」

ケイオー「俺はいつもバスクリンだ」

ワセダ「だから？」

ケイオー「……それだけだ」

ワセダ「……じゃ、死にますか」

ケイオー「あと、温泉の素もいいぞ、『箱根の湯』とか、『伊豆高原の湯』とか」

ワセダ「いいですね。あー、死ぬ前にもう一度、本物の温泉浸かってのんびりしたかったな」

ケイオー「今から二人で行こうか？」

ワセダ「ダメですよ。もう死ぬって決めたんだから。決心が鈍らないうちにさっさと死にましよう。あ、そうだ、飛び降り自殺は？」

ケイオー「飛び降り？」

ワセダ「すぐ近くに自殺の名所があるんですよ。断崖絶壁の崖の上から、海に向かって、（ジエスチャーで）ダイブ！」

ケイオー「無理」

ワセダ「なんで」

ケイオー「オレ、泳げないもん」

ワセダ「……泳ぐ必要ないでしょ。死ぬ為に飛び込むんだから。第一、海面に落ちる頃には意識も飛んでるし、海に落ちた瞬間、内臓破裂で即死ですよ」

ケイオー「無理無理無理！」

ワセダ「……ケイオーさん、あなた本当に死ぬ気あるんですか？」

ケイオー「……ある、かな？」

ワセダ「かな？ってなんですか、かな？って。死ぬ気あるんですね？」

ケイオー「ある、……かも」

ワセダ「かもじゃダメ！本気なら死に方考えて下さい。どんな死に方でも構いません。

僕はケイオーさんの決定に従います」

ケイオー「じゃ……」

ワセダ「じゃあ？」

ケイオー「……凍死ってのはどう？」

ワセダ「凍死って、凍え死ぬんですか？どこで？冷蔵庫の中ですか？」

ケイオー「……南極？」

ワセダ「どうやって南極まで行くんですか！？」

ケイオー「……泳いで？」

ワセダ「いけるわけじゃないでしょ、ていうか、あなた泳げないって言ったでしょ！」

ケイオー「……じゃ」

ワセダ「じゃあ？」

ケイオー「餓死！」

ワセダ「餓死？飲まず食わずで衰弱死するのを待つってことですか？そんなのめっちゃめちゃ時間かかるじゃないですか。第一俺、食べるの大好きだから、餓死はイヤです」

です」

ケイオー「何が好きなの？」

ワセダ「ランキング一位は、やっぱお袋のおハギかな」

ケイオー「おハギ！？母ちゃんのオハギ、俺も大好物なんだ」

ワセダ「……やっぱりお袋の味は最高ですよ。って好きな食べ物言い合ってるんですか、お見合いじゃないんだから」

ケイオー「……趣味は？」

ワセダ「読書です。……だからお見合いじゃないって言うてるでしょ。早く死に方考え

てくださいー！」

ケイオー「……老衰」

ワセダ「老衰は自殺じゃない！」

ケイオー「……腹減ったね、なんか食い物ない？」

ワセダ「(怒りに震えながら) ありません」

ケイオー「コンビニでなんか買ってきていい？いや、腹減ったまま死ぬと、幽霊になってもずーっと腹減ってるような気がして。食ったらすぐ死ぬから。ね、買って

来ていい？」

ワセダ「行って来て下さい、今すぐ！ダツシユで！俺の決心が鈍らないうちに速攻で買

ってきてくださいー！いってらっしゃーいー！」

苛立ったワセダ、追い出すようにケイオーを送り出し、大きなため息。

波の音が大きく聞こえる。  
ワセダ、何気なく柵の上にある、古いサインボールを見つけ、手に取る。

ワセダ「なんだこのボール、……英語？なんて書いてあんだ？」

更にその傍らにある、古い日記を手にとって見入る。

ワセダ「……最後の早慶戦？」

ワセダ、そのページを開く。

ワセダ（読んで）昭和16年、第二次世界大戦が始まると、野球やテニスなどは敵性スポーツと云われ、当時国民的人気を誇っていた六大学野球リーグすら、試合は土日のみに限るとされ、虐げられた。そしてついに、昭和18年4月6日、軍部の強い意向を受けた文部省は、東京六大学野球連盟に解散命令を下す。これにより、大正14年の発足以来、燃やし続けてきた六大学リーグの伝統は、風前の灯となってしまう。

多くの学生がリーグ戦という目標を失って途方にくれる中、何が何でも学生野球の火を消すまいと戦った若者たちがいた。

これは、日本中が戦争一色に染まっていた暗黒の時代、銃の代わりにバットを握り、手榴弾の代わりにボールを投げて、最後の最後まで国家や時代に抗おうとした若者たちの、熱く激しい真実の青春物語である」

神宮球場の早慶戦の大歓声が先行して聞こえてきて……。

○ 神宮球場の早慶戦／昭和16年12月8日

那須野応援部長「フレ〜……、フレ〜……、ワッ、セツ、ダッ、それー……」  
応援団「フレフレ、早稲田！フレフレ、早稲田」

ブラスバンドが『紺碧の空』（『栄光の早稲田歌集』②か⑥より）のイントロを奏で始め、力強い早稲田応援団の合唱が始まる。

グラウンドでは、今日も熱戦を繰り広げている早慶両軍の選手達。  
スコアボードが接戦を示している。

早稲田のマウンドには二年生エースの相本、打席には慶応の四番、別府。レフトから近松が、ファーストからは笠井が、「落ち着け相本」「楽に楽に」とマウンドに激を飛ばし、慶応ベンチからは阪下が別府に「落ち着いて、狙い玉を絞っていけ」と声をかけている。

ピッチャー相本、振りかぶって、渾身の一球を投げた……！！  
別府がフルスイング！

カキン！という打球音と共に、マウンドの相本が右肩を押さえて倒れ、苦痛に顔を歪める。

別府の強烈な打球が、相本の右肩を直撃したのだ。  
ブラスバンドは演奏をやめ、歌声も止む。

神宮球場の時間が止まり、そこにいる全員が相本を見つめる。

「相本!」「相本さん!」と駆け寄る早稲田の選手たち。

敵である慶応の阪下も「相本、大丈夫か?」と駆け寄る。

打った別府は、一塁にも走らず立ち尽くしている。

仲間に支えられて何とか立ち上がった相本の右腕はダラリと垂れ下がっている。

この瞬間、「選手・相本」は再起不能となった。

と、突然サイレンが鳴り出し、球場のスピーカーからアナウンスが流れ、何事かと見回す選手たち。

場内アナウンス「臨時ニュースを申し上げます。大本営陸海軍部発表、本日、十二月八

日未明、帝国海軍は、南太平洋において米英軍と戦闘状態に入(い)れり。

繰り返します。帝国海軍は、本日未明、南太平洋において、米英軍と戦闘

状態に入(い)れり」

「ついに始まったか」「今度はアメリカとだ」と騒然とする選手たち。

児島陸軍大佐が部下を連れて現れ、「集合!」と一喝。

両軍選手が児島の前に集合、整列する。

児島

「諸君らが今聞いた通り、我が軍は本日、真珠湾にて米軍を急襲し、多大な成果を挙げて宣戦を布告した。いよいよ国運を賭した戦いが始まったのだ。この戦争に勝つために、国民はあらゆる困難に打ち勝たなければならぬ。諸君らにもやがて、勤労動員に参加してもらおう日がやって来るだろう。その時は是非、日頃野球で鍛えた肉体と精神で、お国の為に尽くしてくれ」

選手たち「はい!」

場内に『軍艦マーチ』が流れ始めて、

児島 「天皇陛下、万歳!」

一同 「万歳!」

児島 「皇軍、万歳!」

一同 「万歳!」

児島 「解散!」

進軍ラップ(仮)と共に、バット、グラブを持った選手らが四散していく。

○ スクリーンに出演者紹介とタイトル

ユニフォーム姿の出演者に役名と名前が、

例) 相本芳彦 (役者名×××) 早稲田大学野球部4年 マネージャー

以下、同様に主な登場人物が写真と共にクレジットされ、その背景に、当

時の神宮球場、早慶戦、応援部の学生たち、学徒動員の壮行会、戦場で戦

う学生日本兵達のモニタージュ写真。

スタッフクレジットの最後にタイトル、

『ラストゲーム 最後の早慶戦』（仮）、音楽フェイドアウト。

○ 早稲田大学野球部・戸塚球場（昭和18年春）

やる気ない声を出しながら、キャッチボールする笠井と近松、岡島と伴東、金本と壺谷。

目的を失った選手らが、とりあえずの練習をしている感じ。

伴東 「あく、腹減ったばい！おい一年、誰か食い物ば持つとらんね」

金本 「（キャッチボールしながら）持つてるわけないでしょ」

伴東 「だよな、練習前にお前ら一年の部屋ば探しまくったけど何もなかったもんな」

金本 「伴東先輩、勝手に人の部屋探さないで下さいよ」

伴東 「だって腹が減って腹が減って。あー、母ちゃんのオハギば食いたかー」

岡島 「食い物の話ばかりするなよ。こつちまで腹が減ってくるじゃないか」

伴東 「腹減って当然ばい。朝飯食ったら晩飯まで何もなし、寮の昼飯中止なんて考えられんとよ」

笠井 「俺たち学生はまだ恵まれてる。商店街の大人は、子供にメシ食わせる為に一日一食で我慢してるそうだ」

伴東 「一日一食？よくそんなん生きていけますね」

近松 「『欲しがりません、勝つまでは』」

伴東 「近松先輩、勝つも負けるも、腹ペコで練習する気にならんとです」

金本 「その上試合の予定もないし」

壺谷 「試合もないのに練習なんか、やる気になりませんよね」

近松 「バカ、俺が言ってるのは野球の話じゃない。戦地の兵隊さんを思えば腹が減ったぐらいなんだ」

「それはいい心がけだ」と言いながら、児島大佐と部下の荒木田が現れる。

「それはいい心がけだ」と言いながら、児島大佐と部下の荒木田が現れる。

笠井 「（意外な人の登場に）児島大佐」

近松 「どうされたんですか？」

児島大佐 「今からこの運動場で、軍事教練を行う」

金本 「軍事教練？」

児島大佐 「志願学生による匍匐前進と手榴弾投げの訓練だ。判ったら部外者は出て行ってくれ」

笠井 「部外者って、ここは早稲田のグラウンドですよ」

児島大佐 「グラウンドではない運動場だ！気安く敵国語を使うな！」

一同 「……」

金本 「（笠井に）キャプテン、どうしますっ？」

笠井 「マネージャーを、相本を呼んで来てくれ！」

金本・壺谷 「はい！（と行こうとするが）」

「どうした」と学生服の相本マネージャーが現れる。

笠井 「おお相本、今からここで軍事教練やるから場所を空けてくれて」

相本 「大佐、ここは我々早稲田大学野球部の」

児島大佐「そんなことは判っておる！」

相本「我々は今練習中で」

児島大佐「試合もできんのに何の為の練習だ。……ちなみに、これは何だ？」

金本「バットです」

児島大佐「これは？」

壺谷「ボールであります」

児島大佐「これは？」

伴東「はっ、キャッチャーミットであります！」

児島大佐「全て敵性語、憎き米国の言葉ではないか！」

一同「……」

児島大佐「一億国民が一丸となって米英を撃滅する為に戦っている中、こんなくだらん球遊びをして恥ずかしいとは思わんのか！畏れ多くも天皇陛下の軍隊の訓練と、くだらん球遊びと、どちらが大事か答えてみる！」

一同「……」

相本「お言葉ですが」

笠井「(答めて) 相本、よせ」

相本「(構わず) 我ら野球部の学生が野球の練習をすることが、なぜそんなに非難されなければならぬのか自分には理解できません」

児島大佐の目の色が変わる。

児島大佐「相本とか言ったな、一步前に出る」

相本が歩み出る。

空気が凍り、一同が固唾を吞んで見守る。

児島大佐「荒木田」

荒木田「はっ！」

児島大佐「皇軍兵士の訓練を妨害せんとす、この不良学生に精神注入してやれ」

荒木田「精神注入でありますか？」

児島大佐「いつもお前がやられてる通りにやってやれ！」

荒木田「はい！」

荒木田、相本の前に出る。

児島大佐「相本、齒を食いしばれェ！」

相本は表情を変えず、荒木田は躊躇して殴れない。

児島大佐「どうした！早くやれ！」

一同が押し黙る中、飛島先生が現れる。

笠井「飛島先生……」

児島大佐「(動揺して) 飛島先生、どうも、お久しぶりでございます」

飛島先生「陸軍でずいぶん出世したそうだね」

児島大佐「いえ、そんな、全ては飛島先生の教えのお陰であります（敬礼）」

飛島先生「敬礼はやめてくれ、私は軍人ではない。どうした？母校が恋しくなつて訪ねてきたわけではなさそうだな……」

児島大佐「実はその……」

飛島先生「グラウンドは軍事教練には貸さん、少なくとも練習中にはな」

児島大佐「……！」

飛島先生「それに野球が外国から来たからいけないというなら、洋服を着たり英語を習わせたりすることもおかしいということになる。何でも日本式にしなきゃならんというなら、軍人も昔のように鎧を着て兜をかぶり、槍や薙刀を持って戦うのが筋ではないのか」

荒木田「なるほど、それは言えますね」

児島大佐「荒木田を小突き……自分も元は先生の下で野球を習った男です。何も野球をやるなどは言つてません。ただ、こういうご時勢ですから、時と場合によっては軍隊に協力して欲しいと言つてただけで……」

飛島先生「つまり、今は練習は続けてかまわんということだね」

児島大佐「……（躊躇うが）まあ」

飛島先生「ありがとう、恩に着るよ」

児島大佐「（ヤケクソで荒木田に）行くぞ」

荒木田「また駅前のカフェでコーヒーとサンドウィッチですか？」

児島大佐「バカモン！余計なことを云うな！先生、失礼します（敬礼）」

荒木田も倣つて、共に去っていく。

啞然と見送る学生達。

相本「先生、ありがとうございました」

一同「ありがとうございました！」

笠井「いやあ、でも驚いたな。大佐が先生の教え子だったなんて」

飛島先生「……（児島の去つた方を見やり）戦争は人間を変えてしまう」

笠井「昔はあんな風じゃなかったってことですか？」

飛島先生「……」

伴東「それにしても軍人は金ば持つててよかねえ。コーヒーにサンドウィッチか、俺も食いたかー」

岡島「また食い物の話か、いい加減にしろ」

飛島先生「どうした、みんなずいぶん気の抜けた顔をしているな」

笠井「（バツ悪く）さすがにみんな、公式戦の予定がないと練習に身が入らないみたいで」

飛島先生「お前たち、試合の為に練習するのか？」

一同「？」

笠井「と、おっしゃいますと……」

飛島先生「構わず」『一球入魂』の精神を忘れるな。早稲田の野球は一つの道、野球道だ。練習は試合をするためだけにするものではない。学生野球の本分は練習。

練習によって肉体を鍛え、精神を鍛え、卒業したらどこへいっても、さすが早稲田の野球部を出ただけのことはあると言われるような立派な人間になる為に、お前たちは厳しい練習に耐えているんじゃないのか？」

うなだれる一同に、相本が発破をかける。

相本 「練習しよう。練習さえ続けていけば、いつかきつと、試合できる日がやってくる！」

一同が顔を上げる。

笠井 「……よし、みんな、ランニングに行くぞ」

一同 「おおッ！」

笠井 「先生、行ってきます！」

一同、掛け声をかけながらランニングに去る。

相本、改めて飛鳥先生の前に立ち、

相本 「先生、ありがとうございます。自分達は、決して早稲田の野球の火を消しません。たとえ、万が一戦争に借り出されるような事になっても、最後の一人になるまで野球を続けますから！」

飛鳥先生「諦めるな、いつかきつと、また神宮でライバル慶応と試合できる日が帰ってくる」

相本 「はい！」

飛鳥先生、笑顔を残して去っていく。

相本の耳に、遠くからランニングする仲間たちの掛け声が聞こえている…

…。

暗転。

寮のラジオの声、先行して、

アナウンサー「(仮) それでは次に、今日の一曲、作詞・島村抱月・相馬御風、作曲中山

晋平、『カチューシャの唄』をお聞き下さい」

『カチューシャの唄』が流れ出す。

○ 早稲田野球部の寮（日替わり）

庭先で一人、手紙を読んでいる岡島。

その背後に、そーっと近づいて盗み読みする笠井、近松、伴東、壺谷。

笠井 「(女声で音読し) 『私は毎夜、神宮のマウンドに立つあなた様の姿を思い出しながら眠りにつきます』」

『すると必ずあなた様は夢に出て来てくださいます』」

『夢の中のあなた様は……』」

「慌てて手紙を隠し立ち上がり) ちょっとー！」

笠井 「いいなあ、恋文か」

近松 「その、あなた様って、いったい誰のことだ？」

岡島 「……からかわないでください」

伴東 「その彼女、高峰秀子とどっちが美人だ？もう接吻ば済ませたとね？」

岡島 「そんなことするわけないだろ、婚約もしてないのに」  
近松 「……古いな、お前」  
笠井 「古い古い」  
壺谷 「自分も古いと思います」  
伴東 「シーラカンスのごたる男ばい」  
岡島 「(キレて) なんてー」  
笠井 「オンナなんてものは、押し倒してブチユーツとやっちまえばいいんだ」  
近松 「オンナもそれを待ってるんだから」  
岡島 「彼女はそんな女性ではありません!」  
伴東 「じゃ、どげなオナゴね」  
岡島 「どげなオナゴって言われても……、彼女は自分の、宝物であります」  
一同 「冷やかして」「かー」「うわー」「きゃー」  
笠井 「言うねー、宝物だって」  
伴東 「よくもそげな臭つさい台詞が言えたもんばい」  
相本 「(現れて) おい、いい加減にしろ。岡島がかわいそうじゃないか。だいたいお前  
らなんか彼女もいないし、接吻どころか恋文すらもらったこともないだろ」  
岡島 「(驚いて) そうなんですか?」  
一同 「……(うなだれる)」  
近松 「バラすなよ相本、先輩としての顔が丸潰れじゃないか」  
笠井 「そうだよ、お前だつて同じだろ?」  
相本 「俺はお前らとは違う」  
一同 「ええ!?!」  
相本 「俺は、ちゃんと宝物を持つてるからな」  
笠井 「……いつの間に?」  
伴東 「相本さんの彼女は、どげなオナゴですか?」  
相本 「……女じゃない」  
近松 「?……(と一同と見合わせ) てことはお前、まさか、……(オカマ?)」  
一同 「ええええええッ!?!」  
相本 「……俺の宝物は、このサインボールだ」

ベーブブルースのサインボールを出す。

岡島 「サインボール?」  
壺谷 「英語だ」  
伴東 「なんて書いてあると?」  
岡島 「(読んで) ベーブブルース」  
笠井 「ベーブブルースって、あのアメリカ大リーグのホームランバッターか?」  
相本 「そうだ」  
伴東・壺谷 「(きよとんと) へえ……」  
近松 「お前ら知らないのか? 予告ホームランのルースを」  
伴東・壺谷 「はい」  
笠井 「病気で入院してる子供の見舞いに行つて、君の為にホームランかっ飛ばすから、  
病気なんかに負けるな、つて(ジャスチャーも交え) バットで外野スタンドを  
指して、次の球を……カキーン!」  
伴東 「本当にホームラン打つたんですか?」

壺谷 「カツコイイ……！」  
近松 「伝説の大リーガーだよ、なあ、相本」  
相本 「10年前、兄貴が後樂園球場でもらったサインボールなんだ」  
笠井 「お兄さんって、早稲田の先輩で新聞記者をされてる？」  
近松 「確か、戦地でケガをして帰って来られたんじゃないかったか？」  
相本 「従軍記者として戦地に行く時、俺にくれたんだ」  
笠井・近松 「へえ……」  
壺谷 「いいなあ」  
伴東 「よかったら、俺の高峰秀子のピンナップと取り替えてもらえんとですか」  
近松 「バカ」  
伴東 「なんでバカですか、高峰秀子は俺の青春の宝物ですたい！」  
笠井 「お前の宝物は母ちゃんの握ってくれるオハギじゃなかったとね？」  
伴東 「確かにそれも、大事な宝物ですたい！」

みんなが笑う。

相本 「……夢なんだ。いつか俺たち日本人が海を越えて、本場アメリカで野球をやる  
ことが」

笠井、近松が慌てて辺りを窺う。

笠井 「そんな話、憲兵に聞かれたらブタ箱行きだぞ」  
相本 「構わず」いつか日本人とアメリカ人が、同じグラウンドで同じユニフォームを着  
て、一つのボールを追いかける、そんな時代が来たらいいなって」  
近松 「来るわけないだろ、アメリカは敵国だぞ」  
壺谷 「そりゃそうですね」  
相本 「……どうしてアメリカは敵なんだ？いつ誰が決めたんだ？」  
近松 「お国が決めたことじゃないか」  
相本 「お国って誰だ？東条首相か？それとも天皇陛下か？……結局は一人一人の人間  
の集まりだろ。国が違って、肌の色が違って、人間は人間。なんで何の恨  
みもない者同士が殺しあわなきゃいけないんだ？」  
伴東 「そう言われてみると、確かにそうですね」  
相本 「どうせ戦うなら、いっそ野球で勝ち負けを決めればいいんだ。人殺しの道具な  
んか捨てて、バットとボールで勝負する。そしたら誰も死なずに済む」  
近松 「鬼畜米帝がそんな話に応じるか」  
相本 「なぜ鬼畜だと決め付ける、我らが大隈重信先生だって、かつてアメリカの独立  
宣言に大きな影響を受けたじゃないか」  
近松 「時代が変わったんだ」  
相本 「時代はまた変わるかもしれない、いや、変えなきゃいけないんだ」  
壺谷 「どんなふうにですか？」  
相本 「だから、俺たち日本人が、大リーグのグラウンドで思い切り野球ができるような  
時代にだよ」  
笠井 「そんな時代、本当に来るのかな」  
近松 「来るわけないだろ」  
一同 「……」



部部长、那須野秀樹様だ！」

別府 「勝手に自己紹介すな、しかもなんで自分だけ様つけてんねん」

那須野 「なぜ俺にだけ様をつけたか、それは……、俺様が、私学の雄、世界一の校歌を誇る早稲田大学の応援部長だからであーる！」

別府 「ちよ、待て。私学の雄は俺ら慶応や。それに早稲田の校歌が世界一やなんて、誰が決めたんや」

那須野 「校歌が発表された明治40年から決まってるんだよ。かの大隈老公建学の精神をそのまま文字にしたこの校歌は、我が国に数少ない男の校歌であーる」

阪下 「男の校歌って、女は歌っちゃダメなのか？」

那須野 「早稲田の校歌は聞かせる歌ではない、歌う歌だ。心を込めて歌え、ペロペロになっても歌え！タクアンを噛むように歯切れよく歌え！」

別府 「おい君、質問に答えてないぞ」

那須野 「♪都の西北ワセダーのモリにー♪」

近松 「もういい、那須野」

笠井 「これ以上早稲田の恥を晒すな」

那須野 「恥とはなんだ！俺は今、いかに我らの校歌が素晴らしいかということを」

別府 「イエール大学の猿真似やる？」

那須野 「なに？」

別府 「早稲田の校歌は、アメリカのイエール大学の校歌・オールドイエールをそっくり真似て作られたつちゅう噂やで」

早稲田の選手たち 「ええ！」

那須野 「おのれ別府、聞き捨てならん！デタラメにもほどがあるぞ！」

相本 「確かに、そういう説はある。というより、日本の学校の校歌は、ほとんど欧米の学校の歌を参考に作られたらしい」

両校一年生ら 「えー、そうなんですか？」

阪下 「校歌の話はよく知らんが、そもそも早稲田は、我らが慶応義塾大学の創設者、福沢諭吉先生の勧めで作られた学校だろ？」

壺谷・金本 「ええ？」

相本 「それも本当だ」

別府 「つまり早稲田は、俺ら慶応の弟分みたいなもんやな」

那須野 「何を言う、早稲田の創設者大隈重信公は、日本で初めての政党内閣を作り、明治31年と大正3年、二回も内閣総理大臣になったお方だぞ」

阪下 「それを云うなら、慶応の福沢先生だって、日本に一早く西洋の文化を広め、著書『学問のすすめ』では、『天は人の上に人を作らず、人の下に人を作らず』という名言を残された、立派な教育者だ」

那須野 「早稲田の方が上だ！」

早稲田の学生たち 「そうだそうだ！」

別府 「慶応や！」

慶応の選手たち 「そうだそうだ！」

伴東 「あの、ちなみにまた僕の勘なんですけど、たぶん慶応の福沢諭吉先生は、そのうちお札の顔になるんじゃないかなーって」

近松 「お札って、お金のお札のことか？」

伴東 「はい」

笠井 「百円札の顔になるってことか？」

伴東 「いや、たぶん、一万円」

一同 「(驚愕で) 一万円!?!」  
近松 「そんなものがどこにあるんだ、お札は百円までだろ?」  
伴東 「今はそうです。だけどこれから千円、五千円、一万円と次々お札になるんです」  
一同 「ええ!?!」  
別府 「そんなお札、いつできんねん」  
伴東 「たぶん……五、六十年後ぐらいに。……いや、これは単なる勘ですよ」  
一同 「……」  
阪下 「おかしなことを云う奴だな」  
別府 「お前、アタマ大丈夫か?というか、早稲田は、こんな奴ばっかりか?」  
近松 「ほら見る那須野、貴様のせいで早稲田全体がバカにされてるじゃないか」  
笠井 「何が一万円札だ、そんなものできるわけないだろ」  
伴東 「(ぶち切れて) あー、そうですか、じゃもし五十年後か六十年後の未来に、本当に一万円札ができてたらどげんしてくれます?」  
一同が口々に「できるわけないよな」  
「ありえませんよ、一万円札なんて」  
「こいつ病院に連れてった方がいんじゃないかねえか?」などと伴東をバカにする。  
伴東 「(更にブチ切れて) だから、単なる勘だって言ってるじゃないですかっ!」  
相本 「まあまあ、……ところで阪下、いったいどんな用事で来たんだ」  
阪下 「だから言ったろ、様子を見に来たって。お前らが、まだ情熱を失くしてないかどうか」  
笠井 「情熱?」  
阪下 「決まってるじゃないか、野球への情熱だ」  
相本 「……早慶戦か」

阪下が頷き、一同の顔も、きりりと引き締まる。

阪下 「そうだ、慶早戦だ」  
笠井 「お前はどうかなんだ」  
阪下 「(ユニフォーム姿を示し) 見ての通り」  
相本 「もちろん、俺たちもだ(クラブやボールを示す)」  
一同 「……」  
那須野 「ちよっと待った! 阪下、お前さっき早慶戦のことなんて言った?」  
阪下 「慶早戦か? お前から早稲田から見たら早慶戦かもしれんが、俺ら慶応からしたら慶早戦だろ」  
那須野 「いいや、誰から見ても早慶戦は早慶戦だ!」  
別府 「早慶戦でも慶早戦でもええやないか、慶応と早稲田が野球をやることに変わりはしない」  
那須野 「慶応と早稲田じゃない、早稲田と慶応だ、慶応を先に云うな!」  
阪下 「やろうぜ、近いうちに」  
相本 「ああ、やろう」  
笠井 「今は軍部がうるさいが、落ち着いたら必ず」  
阪下 「おお」  
那須野 「おいおい、俺を無視して話を進めるなよ!」  
阪下 「じゃ、またな」  
相本 「ああ」

近松 「しつかり練習しとけ！」  
阪下 「こっちの台詞だ」  
那須野 「帰るのか？俺を無視したまま帰るのか？」  
阪下 「那須野」  
那須野 「なんだ」  
阪下 「……」

阪下は何も言わず、下級生・山川、田所と共に駆け去っていく。

那須野 「なんなんだよ、名前呼んだだけかよ、おい、ちよつと待てよ」  
笠井 「さあ、俺たちも練習始めるぞ！」  
一同 「はい！」  
那須野 「おい、ちよつと待てよ！」

一同が駆け去る中、別府が相本に歩み寄る。

別府 「相本……、具合はどうだ」  
相本 「(笑顔で) 相変わらずだ」  
別府 「そうか……」  
相本 「……どうした、何か言いたいことがあるのか」  
別府 「いや、なんでもない。じゃあな！」

別府、駆け去っていく。

見送る相本、振り返って行きかけるが、足が止まる。

現れたのは、片足を無くし松葉杖をついた兄・相本信一郎記者。

相本 「兄貴……」  
信一郎 「まだこんな所にいたのか」  
相本 「……まだって？」  
信一郎 「リーグ戦が禁止され、試合もできなくなったのになぜ野球部は解散しない」  
相本 「いづれ試合はやるよ、今、慶応の連中とも約束したところなんだ」  
信一郎 「……」  
相本 「どうしたの？」  
信一郎 「職業野球の用語から全て外来語が排除され、後樂園球場のスコアボードには、『進め一億火の玉だ』の標語が掲げられたこの時代に、お前はいったい何をしている」  
相本 「何をつて……」  
信一郎 「お前の親父はガダルカナルで誰に殺された？俺のこの脚は、ミッドウエーで誰に奪われたんだ」  
相本 「……兄貴、気持ちは判る。でも憎むべきは戦争そのもので、敵国だけを悪者に考えるのは」  
信一郎 「お前は何も判ってない！」  
相本 「アメリカにもイギリスにも、俺たちと同じようにケガをしたり、家族を失って悲しんでる人が大勢いるはずだ」  
信一郎 「俺は反戦主義者の非国民の為に苦勞して学費を納めてるんじゃない！」

見つめあう二人。

若い記者が現れ、信一郎に声をかける。

若い記者「相本さん、こんなところにいたんですか。そろそろ戻らないと、また編集長に怒られますよ」

信一郎「すぐに行く。先に帰っててくれ」

若い記者「了解です」

若い記者、去っていく。

相本「……思い出してくれ。兄貴がまだ中学生だった頃、親父と一緒に後樂園球場に

日米野球を観に行った頃のこと」

信一郎「……忘れたよ。俺が覚えているのは、親父の戦死通知が届いた日のことだけだ。

お前も早く目を覚ませ。憲兵に捕まってブタ箱にぶち込まれる前にな」

信一郎、言い捨てて、去っていく。

愕然と見送る相本。

そこに、血相を変えた金本と壺谷がグラウンドから駆けつけてくる。

金本「相本さん、大変です！」

相本「どうした」

壺谷「軍の人が、球場の金網や、観客席の鉄骨を軍需物資として差し押さえるって」

相本「なんだって……！」

相本ら、グラウンドに向かって駆け去っていく。

## ○ 戸塚球場

児島大佐が連れて来た荒木田以下軍人達と早稲田野球部が、フェンスの前で揉みあっている。

笠井「勝手にグラウンドに入らないで下さい」

児島大佐「グラウンドじゃない運動場だ、何度言ったら判るんだ！」

相本らが駆けつける。

相本「笠井、どうした」

笠井「おお相本、どうにかしてくれ。鉄製の応援席と金網を全て撤去するって」

相本「なんだって？」

児島大佐「お前らお国に逆らう気か」

相本「飛鳥先生はご存知なんですか」

児島大佐「先生は関係ない。大学当局の許可も既に得ている。逆らえば憲兵に差し出すぞ！」

笠井「大学が、許可した……!？」

選手ら、愕然と抵抗を止める。

相本 「それは、本当ですか？」

児島大佐 「本当ですかとはどういう意味だ！」

一同 「……」

児島大佐 「もはや祖国日本は、一步も引けない絶対の危機に立っている。同盟国ドイツの学生たちは既に立ち上がり銃を取った。それなのに貴様らは何をしている！大日本帝国の軍隊は、貴様らの愛国心と教養と人格に、大いに期待をしてるんだぞ！」

神妙に聞いていた選手たちの列にいた岡島が、突然激しく咳き込む。

相本 「岡島……！」

伴東 「大丈夫か？（背中を摩る）」

みんなが心配して岡島に駆け寄る。

児島大佐 「見え透いた芝居するな！」

伴東 「芝居じゃなかと。岡島はずっと肺を患つちよって、時々発作が起きるとです。

さあ岡島、葉飲みに行くばい、歩けるか」

咳き込む岡島に肩を貸し、伴東が寮に向かおうとするが、その前に児島大佐が立ちはだかる。

伴東 「？……なんですか」

児島大佐 「気合が入つたらんから咳が出る、この俺が精神注入して治してやろう。歯を

食いしばれ！」

伴東 「ならば言いよつとですか！」

児島大佐 「どけ！」

伴東 「やめてください！」

伴東と児島大佐がもみ合い、見かねた相本が割ってはいる。

相本 「待ってください。自分が早稲田野球部を代表して精神注入を受けさせてもらいます」

児島大佐 「……なに？」

笠井ら 「相本……！」

相本 「伴東、早く行け！」

伴東 「じゃけんど」

相本 「いいから早く！」

伴東 「はい！」

伴東、岡島を連れて去っていく。

児島大佐「(相本を睨み) いい根性だ、その勇気をお国の為、憎き鬼畜米英を叩き潰す為  
に使う気にはならんか」

相本 「……」

児島大佐「返事をせんか！」

言いながら、鉄拳を食らわす児島。

吹っ飛んで倒れた相本の懐からサインボールが転がる。

一同が、ハツと見る中、児島が近づいてそのボールを拾い上げる。

児島大佐「これはなんだ」

相本 「ボールです」

児島大佐「見ればわかる、なぜ英語が書いてある」

相本 「……」

児島大佐「荒木田、読んでみる(差し出す)」

荒木田「(受け取り) ハッ!……バ、……バ、バ、バ、ルス? バベルスと書いてあります!」

児島大佐「バベルスとは何だ」

相本 「……ベールースです」

荒木田「あら?」

相本 「打撃の神様、ベールースのサインボールであります! 返してください」

相本、素早く荒木田の手からボールを奪い返す。

児島大佐、その大胆な行動に完全に頭に来て、

児島大佐「貴様ら、今の時局をどう考えている。衣料品が配給制になり、食塩すら通帳

配給制度になったというのに、何がサインボールだ! かまわんから球遊びの道

具も全て没収しろ!」

軍人達「ハッ!」

軍人達、バットやボール、グローブなど、手当たり次第にリヤカーに積む。

「ちよつと待ってください」「やめてください」という選手たちだが、強く

抵抗することもできず、突き飛ばされて、遠巻きに見つめるしかない。

そして、バックネットのフェンスが撤去されていく……。

その様子が被せて、

ワセダ「(モノログ) この頃の日本は軍事一色。一般家庭の鍋や釜までが鉄砲の弾にす

る為を集められ、神宮球場にすら高射砲が設置されて防空陣地とされていた。

そしてもちろん、敵性スポーツ野球に対する弾圧はいつそう厳しさを増してい  
った」

## ○ 寮の庭

重苦しい空気に包まれている早稲田の選手たち。

金本 「信じられない、観客席や金網まで戦争の道具にしてしまうなんて」

壺谷 「それだけ戦局が悪化しているということだろ」

伴東 「日本は……、負けるのですかね」  
近松 「バカなことを云うな！日本は神の国だ！」  
一同 「……」

近松 「こうなったらみんなで志願しよう。まずは憎き米英を撃滅し、それからまたここに帰って来て、思い切り野球をやるうじやないか」

壺谷 「……だけど、戦争に行けば死んでしまうかもしれない」

近松 「貴様は御国の為に死ぬのが怖いのか！」

伴東 「ばってん、死んだら二度と野球もできんじやなかですか」

近松 「なんだと！」

近松が伴東の胸倉を掴むと、笠井が慌てて止める。

笠井 「近松、よせ。ケガでもして、試合できなくなったらどうするんだ」  
一同 「……？」

伴東 「試合って？」

笠井 「がんばって練習を続けていれば、いつかまた試合できる日が来る」

根拠のない楽観的な発言を、誰も信じられない。

笠井 「お前ら、早慶戦をやりたくないのか？」

岡島 「やりたいです、でもどうやってやるんです？」

近松 「バットもボールもグローブもないんだぞ」

壺谷 「道具なしでは、野球はできませんもんね」

伴東 「ついでに、食い物もろくにないし」

みんなが、その通りだと諦め顔で俯く。

笠井 「たとえ道具がなくても、ランニングや、腹筋、腕立て伏せ、やれることはいくらでも。飛鳥先生も言ってたじゃないか、早稲田の野球は一筋の道だって。練習こそが学生野球なんだって」

笠井の言葉に誰も顔を上げる者はいない。

黙って聞いていた相本が突然立ち上がる。

相本 「甘ったれるな！」

一同 「？」

相本 「……道具がないから野球ができないだと？たとえ道具があっても、俺はもう二度と野球ができない、二度とマウンドに立つことができないんだぞ。どんなに野球が好きでも、俺の腕はもうボールを投げることができない。だからマネージャーとして、お前らを陰で支え、応援することしかできないんだ。しっかりとしてくれ、お前らは、俺の夢なんだぞ！」

心を打たれ、噛みしめて聞く一同。

笠井 「相本……」

相本 「すまん、言い過ぎた。……今の話は忘れてくれ。……道具は、俺が何とかするから」

寮を出て行こうとする相本。

近松 「何とかするって……」

笠井 「このご時勢に野球用具を置いてる店なんかほとんどないだろ」

岡島 「たとえあっても、とっくに軍に没収されてるんじゃない……」

相本 「俺はマネージャー。お前らが安心して練習できる環境を整えることが、俺の仕事だ」

相本、一人出て行く。

黙って見送る一同。

笠井 「(立ち上がり) 行くぞ」

金本 「どこにですか？」

笠井 「決まってるじゃないか、練習再開だ」

近松 「よし、行こう！」

全員、顔を見合わせると、笑顔になり、「はい！」と続く。

音楽『 『カットイン。』

掛け声をかけながらランニングする早稲田ナイン。

ワセダ「(モノローグ) 神宮球場は軍用地にされ、早稲田グラウンドの観客席とバックネットのフェンスが撤去され、野球用具さえ奪われてしまった。それでも彼らは諦めず、いつかまた試合ができる日が来ると信じて練習を続けた。そして相本は、野球用具を買い集める為、戦時下の東京の街に出て、足を棒にして歩き続けた」

### ○ モンタージュ

・ 戸塚球場で、基礎体力鍛錬を続ける選手たち。

× × ×

・ リヤカーを引いて用具店を訪ね、道具を売ってもらい、何度も頭を下げながら店を出てくる相本。また次の店に向かう。

× × ×

基礎体力訓練を続ける選手たちの中、岡島がまた激しく咳き込む。  
心配して駆け寄る伴東ら、仲間たち。

伴東 「岡島、大丈夫か？無理するな」

岡島 「大丈夫だ、相本さんの分まで頑張らなきゃ。相本さんは教えてくれた。守備についてる九人の中で、唯一投手だけが相手を攻めなきゃならない。攻めの気持ちなくなったら投手は失格だ。その強い意志を持ち続けるために、投手は誰より厳しい練習をこなさなきゃならないんだって」

岡島、また基礎訓練に戻る。

一同も、気合を入れなおして戻る。

× × ×

用具をいっぱい積んだりヤカーを引き、歯を食いしばって歩く相本が、戸塚球場に帰ってくる。

選手たちが相本とリヤカーを取り囲み、「うわあ」「やった」「ありがとう」ざいます！」と真新しい道具を手にして喜ぶ。

ワセダ「モノローグ」そんな彼らの行動が耳に入ったのか、軍と文部省は更に彼らを締め付けるべく、ある催しの開催を決定した。それは、神宮から井の頭公園までの往復20キロの道のりを、八キロの砂袋を背負い、本物の銃を持って走るという過酷なマラソン大会だった。チームの中に一人でも落伍者が出れば、野球部は即時解散というとんでもない条件が付けられた」

○ 神宮外苑競技場（現在の国立競技場）

マラソン大会に参加する為集まった笠井、近松、岡島、金本、伴東、壺谷が、重苦しい空気に包まれている。

壺谷 「むちゃくちゃですよ。20キロの道のりを、砂袋と銃を担いで走るだなんて」

伴東 「その上、規定時間内に走り切れなかったり、落伍者が出たら野球部は解散……」

金本 「間違はなく嫌がらせ、いや、軍部の野球部苛めですよ」

壺谷 「そうだ、こんなの単なる野球部潰しの口実ですよ」

金本 「みんなで抗議に行きましょう！」

笠井 「無駄だ、既に飛島先生が陸軍本部に抗議に行かれた」

壺谷 「それで？」

笠井 「門前払いを食らったそうだ」

金本 「そんな……」

岡島 「相本さんは？」

笠井 「大学の練成部に参加を辞退させてくれと頼みに行ってるが結果は同じことだろう」

岡島 「このところ、軍と早稲田は、まるで一心同体ですね」

伴東 「仕方なか、こげなご時勢やけん」

一同 「……」

近松 「クッソー、それにしても俺たちは野球部だ、陸上部じゃない。なぜそんなマラソンを走らなきゃならないんだ！」

一同 「……」

近松 「笠井、……俺はいつそ、海軍に志願しようと思う」

一同 「！」

笠井 「近松……」

近松 「思いつきじゃない。ずっと考えていたことだ。多くの学生がそうしてるように、俺も志願して戦争に行くべきじゃないかと。もうたまらんだ。日本を救いたい。早くお国の役に立ちたいんだ！」

笠井 「近松、お前の情熱には頭が下がる。だがあと一年だ。卒業すれば嫌でも出征することになる」

近松 「だけど銃を担いでマラソンさせられるぐらいなら、戦地に赴き敵と戦ったほう

が有意義だと思わないか？頼む笠井、俺の志願を認めてくれ！」

笠井 「近松……」

金本 「ダメです」

一同 「？」

金本 「認められません」

岡島 「金本、お前一年の分際で」

金本 「自分は、近松先輩に野球部をやめてもらいたくありません」

伴東 「それは俺たちだってみんな……」

金本 「……」

近松 「判ったぞ金本」

金本 「？」

近松 「貴様元々、朝鮮人だからだな」

一同 「！」

近松 「朝鮮人だから御国の為に尽くしたいという俺の気持ちに許せんのだろ」

金本 「違います」

近松 「ではなぜ俺の志願を否定する」

金本 「それは……」

近松 「はつきり言え、この非国民の朝鮮人め！」

金本 「……」

見詰め合う近松と金本……。

そこに、飛島先生と相本が、俯きがちにやって来る。

笠井 「相本、飛島先生」

相本 「すまん、今まで粘ったんだが、力及ばずだ。中止にもできないし辞退も許さんと突っぱねられてしまった」

一同 「……」

飛島先生 「もうこうなったら腹を括るしかない。この際、日本中に早稲田野球部の心意

気を見せてやろうじゃないか、大丈夫だ、お前達ならきつとやり遂げてくれる

と信じている」

一同 「……はい！」

相本 「そろそろスタートの時間だな」

一同の前でコートを脱ぐ相本、コートの下のユニフォーム姿に、

一同が目を見張る。

一同が目を見張る。

岡島 「相本さん」

笠井 「相本、お前……」

相本 「どうした、化け物を見るような目で人を見るな。たとえ野球はできなくても俺

は早稲田の一員だ。必ず完走してみせる」

相本の笑顔に、一気に一同の士気が高まる。

笠井 「よし、行くぞ！」

一同 「おおっ！」

音楽、『君死にたまふことなかれ』（ペギー葉山）カットイン。  
一同が砂袋を背負い、銃を担ぎ、臙脂（エンジ）の鉢巻や襷（タスキ）を巻いてスタートラインにつき、正面を見つめる。

那須野「フレ、フレ、わー、せー、だー、……それ！」  
学生たち『フレフレ早稲田！フレフレ早稲田！』

ドーン！と号砲が鳴り、走り出す早稲田の選手達。

ワセダ「解散を賭けた過酷なマラソンレースが始まった。誰もがみんな、何としても完走し、野球部を存続させねばならないという使命に燃えていた。ところが、スタートして間もなく、早稲田の投手岡島の体に異変が起こった」

走りながら、咳を始める岡島。

咳の頻度は、どんどん高くなる。

岡島の悪化と共に音楽はフェイドアウト。

笠井「どうした岡島」

岡島「大丈夫です。ゴホッゴホッ」

伴東「（見かねて）砂袋を貸せ、俺が持つ」

岡島「いや、それは、ゴホゴホッ」

伴東は岡島の背中の砂袋を箒り取ると、抱えて走る。

銃は、壺谷が代わりに担いだ。

岡島「すまんな伴東、壺谷」

壺谷「なに言ってるんですか、岡島さん」

伴東「俺らバッテリーばい。俺はお前の女房役じゃなかね」

身軽になった岡島だが、それでも咳はやまず、やがて苦しきから蛇行して走るようになる。

近松「どうした岡島、しっかりしろ！」

岡島「ゴホッゴホッ……」

ワセダ「元々肺に持病を抱える岡島の容態は急激に悪化し、走るどころか、歩くこともままなぬ事態に陥ってしまった」

岡島、みんなに後れを取ると、ふらふらとその場にしゃがみ込んでしまう。

みんなが、「岡島！」と声をかけ、駆け寄る。

近松「立て岡島！早稲田野球部を潰す気か！！」

岡島「（立てないままに）ゴホッゴホッ……」

近松は、岡島の胸倉を掴むと無理やり立たせ、  
バチン！と、張り手を食らわせる。

近松 「しつかりせんか！気合だ気合！」

岡島 「はい！……ゴホッゴホッ」

近松 「岡島！」

近松がもう一度岡島を殴ろうとしたその手を、見かねた相本が止める。

近松 「相本（なぜ止める）」

相本 「岡島、無理するな、少し休んで様子を見よう」

笠井 「相本の言う通りだ」

近松 「何云ってるんだ、伝統の野球部が潰されてもいいのか！岡島、走れ！」

岡島 「ゴホッゴホッ……」

その時、一年生の金本が進み出て、岡島の前にしやがむ。

金本 「岡島先輩、自分の背中に、負ぶさってください」

伴東 「何ば云うちよつとか、8キロの砂袋ば担がされて、銃を担いで、その上岡島までおぶって走れるわけなかるうが」

金本 「大丈夫です！」

近松 「金本、伴東の言う通りだ、引っ込んでろ」

金本 「いいえ、引っ込みません！」

近松 「……！？」

音楽、『君死にたまふことなかれ』（ペギー葉山）再びカットイン。  
金本、立ち上がり、近松の前に立つ。

金本 「……近松先輩、自分は近松先輩に憧れて早稲田の野球部に入りました、いつも

先輩の背中を見つめ、目標として今日まで練習してきました」

近松 「なんだと……」

金本 「（目に涙を浮かべ）先輩の仰る通り、自分は朝鮮の全州（チョンジュ）で生まれた朝鮮人であります。が、この早稲田野球部を愛する気持ちは先輩達と同じであります！自分は早稲田で野球をやるために海を越えて来ました。やっと夢が叶い、チームの一員になることができました！父も、母も、妹達も、みんなが喜んでくれました。いつか自分も、早稲田の野球道を極めてみたい！それが自分の夢であります！（泣き出して）朝鮮人が早稲田を愛してはいけませんか！朝鮮人が野球部を愛してはいけませんか！確かに自分は戦争で死にたくはありません。ですがこの、早稲田野球部の為なら、いつでも命を差し出す覚悟がありますッ！」

一同 「……」

金本 「（再びしやがみ込んで）岡島先輩！」

岡島 「……金本、すまん、ありがとう」

仲間が素早く金本の砂袋と銃を分担して持ち合う。

岡島は、金本の背中にズシリとおぶさった。

金本 「行きましょう！」

笠井 「よし、……行くぞー！！」

一同 「おお！」

また走り出す早稲田野球部。

応援部の絶叫が遠くから聞こえてくる。

那須野 「フレ、フレ、かー、ねー、もー、とー……それ！」  
学生たち 『フレフレ金本！フレフレ金本！』

ブラスバンドが、『栄冠は君に輝く』（夏の甲子園の曲）の演奏を始める。  
歯を食いしばって走る金本、寄り添う早稲田ナイン。

金本がふらふらになると、近松が代わって岡島をおんぶする。

近松の次は笠井が。そしてまた金本が。

互いに声を掛け合い、励ましあって、ゴールを目指す早稲田ナイン。

が、やがてそれぞれの体力が限界を超え、動けなくなって立ち尽くしてしまふ。

以上の動きに被せて、モノローグ。

ワセダ 「彼らは走り続けた。疲れ果てた体に自ら鞭打ち、互いに励ましあって進む選手たちの姿が、今でも私の脳裏に焼きついている。だが、そんな早稲田ナインの気力も、ゴールを目前にしてさすがに限界を超え、もはや一歩も進めない状況に陥ってしまった。（音楽、フェイドアウト）その時……」

早稲田に遅れをとっていた慶応選手らが、颯爽と背後から走ってくる。

阪下 「（息荒く）どうした早稲田、大丈夫か？」

早稲田ナイン 「……」

別府 「（状況を察して）なんやねん、やっぱり早稲田はだらしないなあ」

近松 「（カッとして）なに！？」

別府 「ほら来い、来い岡島！」

慶応の別府が岡島のおんぶを買って出る。

啞然と見つめる一同。

相本 「別府……」

別府 「ここで早稲田に解散されたら、二度と神宮でコテンパンにしてやれへんからな」

笠井 「阪下、ありがとう！」

早稲田ナイン 「ありがとうございます！」

阪下 「笠井、すまんがこいつら（後輩）に水を一杯恵んでくれんか。水筒の水が底を  
ついてしまっとな」

笠井 「お安い御用だ。いくらでも飲んでくれ」

「俺のも飲め」「自分のもどうぞ」と早稲田の選手が次々と慶応に水を差し出す。

「助かった」と喉を潤す慶応選手。笑顔を交わす一同。

阪下 「よし行くぞ！一緒にゴールだ！」

全員 「おおっ！」

ブラスバンドの『栄冠は君に輝く』再びカットイン。  
ゴール目指して突き進む早稲田・慶応両チームの選手たち。

ワセダ 「彼らはまた走り出した。宿命のライバルとして何度となく死闘を繰り広げてきた早稲田・慶応の両チーム、神宮球場では敵同士でも、ひと度グラウンドを離れば共に野球に青春をかける若者同士なのだ。そしてついに、彼らは過酷な持久走レースを、全員揃って完走したのである」

音楽が高まる中、ゴールする一同。

その場に倒れこむ者、早稲田慶応の隔たりなく、抱き合って健闘を讃えあう者、歓喜の輪ができる。

へとへとになって座り込んでいる金本に、近松が近づいていく。

近松 「金本」

金本 「(慌てて立ち上がり) はい！」

近松 「……おつかれ」

金本 「おつかれさまでした！」

近松 「(あえてぶっきらぼうに)云う) 志願の話だが、……しばらく見合わせることにする」

金本 「(感極まって) よかった、自分も、一日も早く近松先輩に近づけるよう、益々練習に励みます！」

近松 「それと……」

金本 「？」

近松 「たとえ何人でも、どこで生まれ育っても、貴様は永遠に俺たちの仲間だ」  
近松先輩……ありがとうございませーすッ！」

近松が右手を差し出し、金本がそれを受けて硬く握手する。

そんな一同を、みんながホッとした笑顔で見守っていると、

児島大佐と荒木田が近づいてくる。

荒木田 「集合！」

一同が児島大佐の前に並び、

笠井と阪下が、胸を張って児島の前に歩み出る。

笠井 「早稲田大学野球部、全員完走致しました！」

阪下 「同じく慶応義塾大学も、完走致しました！」

全員が、どうだ見たかとはばかりに児島大佐を見つめるが、

児島大佐「……ただ走ればいいというものではない」

笠井「は？」

児島大佐「貴様ら走るばかりに夢中になり、決勝点についた時にはふらふらだつたではないか」

笠井「……それは」

児島大佐「言い訳をするな！……もしそこに敵がいたらどうなる？貴様らの隊は全滅だぞ。そんな心がけで戦争に勝てるか！」

一同「……(不満顔)」

児島大佐「以後、気をつけるように。……行くぞ」

荒木田「ハッ！」

去っていく児島大佐を啞然と見送る一同。

別府「なんや、あの言い草。ごくろうさんの一言ぐらい言えんのか」

阪下「(咎めて)聞こえるぞ」

相本「まあ、よかったじゃないか。とにかくこれで解散は免れたわけだ」

近松「そうだそうだ」

みんながよかったと肩を叩き合い、改めて喜びを分かち合うが、そこに血相を変えた那須野が駆けつけてくる。

那須野「(息荒く)大変だ！今、銀座の日本劇場の電光ニュースで」

笠井「電光ニュース？」

相本「……まさか」

那須野「……ついに、学徒動員が決定したそうだ」

別府「なんやて！？」

那須野「東条英機首相もラジオで演説していた」

阪下「何をだ？」

那須野「……『一億総員、配置につけ』と」

一同「！」

一同の顔に戦慄が走る。

○現代パート②(一幕終わり)

ワセダがこれからいったいどうなるんだろうと本を読んでいると、ケイオーが帰って来る。

ケイオー「……ただいま」

ワセダ「……」

ケイオー「何？」

ワセダ「爺さんの、古い日記を見つけたんです」

ケイオー「へえ」  
ワセダ「……ケイオーさん、あなた今から戦争に行けって言われたらどうします？」  
ケイオー「いやだよ、疲れるし、こわいもん」  
ワセダ「戦時中の日本では、野球は敵国のスポーツだって、禁止されたの知ってます？」  
ケイオー「知るわけないだろ、俺、昭和60年生まれだもん」  
ワセダ「爺さんの青春時代には、野球をやりたくてもできなかった人がたくさんいたそうですね。死にたくないのに、戦争で死んじゃった人もたくさんいたんだろうな」

しみじみ物思いに耽るワセダを見て、ケイオーが尋ねる。

ケイオー「キミさ、そもそもなんで死のうと思っただけ？」  
ワセダ「それはお互い聞かない約束じゃ」  
ケイオー「いいじゃん、教えてよ、どうせもう死ぬんだから」  
ワセダ「……夢も希望もなくて」  
ケイオー「ユメとキボウ？」  
ワセダ「誰もが自分のことしか考えてない腐りきったこの世の中で、このまま大学出て、就職して、なんかいいことあるのかなって」  
ケイオー「あかさ、普通の人はみーんな夢も希望もないけど生きてるよ。そんなことで死のうと思うなんて、バカじゃないの？」  
ワセダ「(カチン) じゃああなたは？どうして自殺サイトにアクセスしてきたんです？」  
ケイオー「それは……秘密」  
ワセダ「なんで！？俺のは聞いたくせに！」  
ケイオー「教えてくれたら教えるなんて誰が言った？」  
ワセダ「……最低ですね」

ケイオー、ごそごそとコンビニの袋から薬を取り出して飲むとする。

ワセダ「なんですか？」  
ケイオー「風邪薬。(取り出して見せ) 昨日からちよつと鼻水がね」  
ワセダ「風邪治してどうすんですか？これから死のうとしてるのに、薬飲んで元気になつてどうするんですか？」  
ケイオー「……マジで死ぬの？」  
ワセダ「……ケイオーさん、あなた慶応大学の学生でしょ？最後の早慶戦って知ってます？」  
ケイオー「……なにそれ」  
ワセダ「……もういいです (また日記を開く)」  
ケイオー「なんで？自殺やめたの？」  
ワセダ「続き読みます、読み終わるまで死ねなくなっちゃったんです。気が散るから出てって下さい！ほらほらほらー！」

ワセダ、ケイオーを追い出して。

ワセダ「(一息ついて、場内に) 只今より、15分間の休憩とさせていただきます」

○ 休憩

○現代パート③（二幕冒頭）

集中して祖父の日記を読んでいるワセダ。  
その周囲を退屈そうにうろついているケイオー。

ケイオー「ねえ、自殺しないの？……早く自殺してみてよ」

ワセダ、集中して読んでいる。

ケイオー「実は俺、最初っから死ぬ気ゼロ。自殺なんかする気ないんだよね。ただ、自殺サイトにどんな奴が集まっているのか、面白半分に見に来ただけなのよ。……怒った？あれ？ねえ、聞いている？」

ワセダ「（ハッと我に返り）え？なんか言いました？」

ケイオー「なんだよ、聞いてなかったのかよ」

ワセダ「すいません、ちよつと入り込んでやって」

ケイオー「そんなに面白いの？その、最後の早慶戦ってやつ」

ワセダ「あなたは気にならないんですか？学徒動員になって、早稲田や慶応の野球部がどうなっちゃうのか」

ケイオー「どうなるの？」

ワセダ「……よかつたら一緒に読みませんか。俺はワセダで、あなたはケイオー。これも何かの縁じゃありませんか。最後の早慶戦の運命を一人で見届けましょう」

ケイオー「ええ……（興味ない）」

ワセダ「いいからほら、ここに座って。目を閉じて想像してみてください」

ケイオー、座らされて、素直に目を閉じる。

ワセダ「爺さん達の時代の日本が、いったいどんな国だったのか。戦時中の若者たちが、何を考え、どんな青春を過<sup>すご</sup>していたのか。……いいですか、読みますよ」  
ケイオー「……早く読んで」

ワセダ「昭和十八年九月、時の首相・東条英機は全国民に向け、『一億総員配置につけ』と呼びかけ、政府は学生の徴兵猶予を全面的に停止すると発表。これにより、21歳以上の学生は、徴兵検査を受け出征することになった。いわゆる学徒動員の決定である。当然、早稲田・慶応の両野球部も、国家の下した決定に従うほかに、野球部自体の解散を余儀なくされたのだ」

音楽、『若鷲の歌』カットイン。

○児島大佐の演説

児島大佐「出陣学徒の諸君！申すまでもなく君達は、その燃え上がる魂、その若き肉体、その青春なる血潮、すべてこれ、御国（みくに）の大御宝（おおみたま）（おおみたま）からなのである。もとより敵米英においても、諸君と同じ幾多の若き学徒が戦場に立っている。だが諸君らは、彼らと戦場で相対しても、気迫においても、戦闘力

においても、必ずや彼らを圧倒してくれるものと信じている！あらゆる手段方法をもって、一人でも多くの敵を殺し、そして万が一の時は、生きて虜囚の辱めを受けることなく、最も効果的な死を選べ！諸君らの健闘を祈る！」

『若鷲の歌』 フェイドアウト。

○ 戸塚球場

部員たちが丸く円を描いて整列し、それぞれ惜別の言葉を述べている。下級生の中には、鼻を吸って涙を堪えている者もいる。

笠井

「急な話で、正直まだまとまった考えが浮かんでこない。俺に言えるのは、早稲田の野球部で鍛えられた者として、戦地に行っても恥ずかしくない働きをして来ようと思っっている」

近松

「俺はこの日が来るのを待っていた。もはや生きて帰ってくる事ができなくても本望だ。だが戦地に行くその日まで、俺は早稲田の野球部員だ。最後の最後まで、練習だけは続けたいと思っっている」

下級生たち「……」

笠井「じゃ、最後に、相本」

相本

「……俺は、……何もない。ただ……」

近松

「……ただ、何だ」

相本

「最後に何か、思い出を残すことはできないだろうか」

笠井

「思い出とは？」

相本

「たとえば……、最後にもう一度だけ……、早慶戦をやることはできないかな」

一同

「……？」

伴東

「よかですね、最後の早慶戦！」

金本

「是非やりましょう！」

壺谷

「自分も賛成です！」

笠井

「簡単に云うな、徴兵検査まであと一ヶ月もない。それに試合をやるとなれば慶応側の都合だって」

物陰で聞いていた阪下と別府が現れる。

相本

「阪下！」

阪下

「慶応大学野球部は、全員一致で最後の早慶戦をやりたいと言っている。既に小

相本

泉塾長以下、大学当局の賛成も得た」

相本

「本当か！」

別府

「このままで戦争なんか行けるかい！」

相本

「ようし、そうと決まったらまず球場だ。神宮を使えるように文部省に交渉してみよう」

笠井

「文部省が簡単に許可してくれるか？」

相本

「元々学生の作った外苑球場だ、文部省にあれこれ言われる筋合いはないだろう」

阪下

「その前に、早稲田の方は大丈夫なのか？」

別府

「早稲田に対する軍部からの圧力、相当厳しいんやろ？」

相本 「なに、俺たちの最後の頼みだ。軍や大学側だって融通を利かせてくれるさ」

笠井 「よし、そうと決まったらさっそく練習だ！」

一同 「おおッ！」

阪下 「相本、吉報を待ってるぞ」

相本 「ああ、任せておけ！」

相本を残し、一同が去っていく。

ワセダ 「だが、相本の交渉は難航した。総長以下、早稲田大学当局は、戦局の悪化に伴い益々野球を敵視する軍に気兼ねして、なかなか許可を出してくれなかったのだ」

○必死の交渉を続ける相本・モンタージュ

相本 「この学徒動員で、早稲田から六千、慶応からも三千人の学生が戦地に旅立って行きます。最後にたった一試合だけでいいんです！学生生活のピリオドを打つのにこんないいことが、なぜダメなんですか！」

ワセダ 「必死に頼む相本に、軍や大学当局は、『この時期に大勢の人を集めて爆撃でもされたらどうする』と首を縦に振ってくれなかった」

相本 「試合中にグラウンドの上に敵機が飛来して来る可能性が、いったい何パーセントあると言うのですか？人を集めるのがいけないというなら、職業野球はどうなんです、国技館で行われている相撲はどうなんですか」

ワセダ 「相本と共に、飛島先生も各方面に足を運び、万が一の時は早稲田野球部が全責任を負うとまで言って説得に当たったが、いずれもよい返事をもらえないまま、いたずらに時間だけが過ぎていった」

一人、立ち尽くす相本の元に、那須野が近づいてくる。

那須野 「相本、まだ許可は下りないのか」

相本 「……」

那須野 「いったい早稲田はどうなってるんだ。慶応側は塾長以下が一丸となって最後の早慶戦を後押ししようとしているのに、なぜ総長はウンと言ってくれない」

そこに笠井以下、早稲田野球部の面々が駆けつける。

笠井 「どうだった？」

相本 「……」

近松 「なぜ!？」

岡島 「慶応の選手の中には、痺れを切らせて一旦郷里に帰ってしまった者もいるそうです」

那須野 「なんだと!？」

相本 「……神宮がダメなら戸塚球場でもいいから頼んだが、おそらく軍の圧力で……」

…」

近松 「こうなったら大学なんか無視して勝手にやるか」

笠井 「そんなことをすれば退部や退学にもなりかねん」

近松 「退部も退学もあるか、俺たちはじきに戦争に行くんだぞ」

那須野 「近松の言う通りだ、戦争に行けば二度と生きて帰れないかもしれないんだぞ」

笠井 「残された後輩はどうなる？大学当局を無視して試合を強行すれば、野球部は廃部に追い込まれるかもしれないじゃないか」

一同 「……」

近松 「確かに、……その通りだ」

金本 「相本さん、何とかしてください！どうしてももう一度、先輩達と野球がやりた  
いんです！」

伴東 「俺も金本と同じ気持ちですたい！」

岡島 「自分も」

壺谷 「自分もです！」

一同に見つめられ、沈黙考の相本。

相本 「……わかった。こうなったら、……奥の手を使う」

近松 「……奥の手って？」

笠井 「どういうことだ？」

相本 「……」

○ 毎朝新聞社

信一郎記者が、原稿を書いていると、若い記者が帰社して、

若い記者 「憂鬱な顔で」 たいいま

信一郎 「おお、どうだった、上野動物園」

若い記者 「どうもこうも、……かわいそうで見られませんでしたよ」

信一郎 「ついに死んだのか、ゾウの花子」

若い記者 「(頷いて) 係員のおじさんは、途中からオイオイ声を上げて泣いてました。そ  
りやそうですね、殺すために何年も世話してきたわけじゃないんですから」

信一郎 「どこか、地方の動物園に引き取ってもらうことはできなかったのか？」

若い記者 「爆撃され檻が壊されたら人間に危害を加える恐れがあるって理由で殺された  
わけですから、日本中どこへ行っても……」

信一郎 「ゾウの花子が戦争してるわけじゃないのにな」

若い記者 「人間の都合で、勝手に日本に連れて来て、また勝手な都合で殺して……」

信一郎 「毒殺か？」

若い記者 「十日間絶食させられても毒入りのエサを食べようとせず、馬に使う太い注射  
器の針も折れて、結局飢え死にさせられました。よっぽど腹が減ってたんでし  
ょうね。人の気配を感じるとエサをねだって、今まで係員に教えられた芸を一  
つ一つ丁寧にやってみせて、最後は自分の小便まで飲んで、疲れ果てて、眠る  
ように……花子だけじゃないんですよ？上野動物園じゃこの一ヶ月の間に、ゾ  
ウ3頭、ライオン3頭、トラ1頭、ヒョウ4頭、ヒグマ2頭、北極熊2頭、全  
てこの戦争の為に殺されてしまったんです」

信一郎「つらいな」

若い記者「あー、こんな記事、どうやって国民の士気が上がるように書けて云うんですか(頭を掻き筆る)」

電話が鳴りだす。

若い記者「編集長にも報告して来ます(去る)」

信一郎「(アイコンタクトで見送り、電話に出る) はい、毎朝新聞編集部……なんだお前か、……なに?……お前、日本が今どんな状況に置かれているか判ってるのか、バカも休み休み言え!……今、下にいる?」

そこに、荒木田が「失礼します!」と入ってくる。

荒木田「児島大佐をお連れ致しました!」

信一郎「(電話に) 来客だ、切るぞ。そのまま帰れ。二度とかけてくるなよ」

信一郎が一方的に切ると、児島大佐が入ってくる。

松葉杖をついて立ち上がり、

信一郎「ご苦勞様です、大佐、わざわざお越しいただいて申し訳ありません」

児島大佐「なに、吉原の遊郭に寄った帰りだ。気にするな」

信一郎「相変わらずお壮んですね」

児島大佐「古今東西、英雄色を好むと云うではないか。それより先の御前会議で決定した絶対防衛線の詳細が決まった。明日の一面にデカデカと載せてくれ」

信一郎「はい」

荒木田が「こちらです」とメモを渡し、信一郎が受け取る。

児島大佐「くれぐれも国民の士気をガーンと高める文章で頼むぞ」

信一郎「……わかりました」

そこに、相本が入ってくる。

相本「(驚いて) 大佐……」

児島大佐「なんだ、学生の分際で新聞社なんぞに何の用だ」

相本「……」

信一郎「……実は、自分の弟なんです」

児島大佐「オトウト? (二人を見比べ、相本に) メシでもたかりに来たのか?それともまさか、まだくだらん野球の試合を諦めてないわけじゃなからうな」

相本「……」

荒木田「おい学生、大佐殿の質問に答える!」

児島大佐「……(信一郎に) 念の為言っておくが、いくら兄弟だろうが、こんな奴らのバカな計画の片棒を担ぐような記事を書いたらプタ箱行きだぞ、わかっているな」

信一郎「そのようなご心配は無用です」

児島大佐「フフ……さすがに兄貴は大人だな。爪の垢でも煎じて飲ませてもらったらどうだ？ 荒木田、せっかくだから三越デパートのビアホールにでも寄って行くか」  
荒木田「ハッ、喜んでお供します！」

児島大佐と荒木田が去り、見詰め合う相本と信一郎。

信一郎「何しに来た、記事のことなら断ると言ったはずだ」

相本「新聞にさえ載れば、さすがの総長も、大学当局も認めざるを得なくなると思うんだ」

信一郎「断る。聞いただろ、そんな記事を書けば俺はブタ箱行きだ。第一なんで俺が憎き敵国の、敵性スポーツの試合を煽るような記事を書かなきゃならない」

相本「兄貴……」

信一郎「帰ってくれ。俺は忙しいんだ」

相本「また大本営発表の、ウソばかりの提灯記事を書くのか？」

信一郎「……なに？」

相本「日本は、この戦争に負ける。兄貴だつてとつくに知ってるはずだ。それなのにどうして……」

信一郎「話は終わった、帰ってくれ」

相本「……」

信一郎「帰れと言ってるんだ！」

睨みあう兄弟……。

そこに、痺れを切らせた早稲田野球部の部員が、「相本！」「相本さん！」と呼びながら駆け込んでくる。

相本「お前ら……」

信一郎「なんだお前ら、無断で入ってくるな！」

黙って信一郎を見つめていた面々の中、伴東が突然土下座する。

『カチューシャの唄』（インストウルメンタル）カットイン。

伴東

「お願いします！最後の早慶戦ばやらしてください！熊本の母ちゃん、東京に呼んでやりたかです。ガキン頃から明けても暮れても野球野球で、苦労ばかりかけてきた母ちゃんに、ろくに親孝行できんかった。せめて最後に、母ちゃんば東京に呼んでやりたか。天下の早慶戦ば見せてやりたかです！」

岡島も、伴東に並んで土下座する。

岡島

「自分には恋人がいます。まだ手も握ったこともない恋人ですが、自分は彼女のことを大好きです。学徒動員が決まると、彼女は自分に結婚して欲しいといいました。式なんか挙げなくていいから、籍だけ入れて欲しいと。だけど自分は、うんとは言えませんでした。生きて帰れないかも知れない。大好きな彼女を戦争未亡人にしたくないからです。それ以来、自分は彼女に一度も会ってません。せめて最後の思い出に、マウンドで全力投球する姿を見せてやりたいんです！」

笠井も土下座する。

笠井 「俺の親父は、去年ミッドウエーで死にました。戦地から届いた最後の手紙には、また神宮に応援に行くのを楽しみにしてるからしつかり練習しろと書いてありました。俺に野球を教えてくれたのは親父です。投げ方も、打ち方も、男としての生き方も、全部親父に教えてもらいました。今も天国で見守ってくれてる親父に、もう一度だけ、晴れ姿を見せてやりたいんです！」

三人に倣って、部員たちが次々と「お願いします！」と土下座する。藁にもすがる思いで信一郎を見つめる早稲田ナイン。

信一郎 「……断る」

相本 「……兄貴！」

信一郎 「俺は野球が嫌いなんだ」

一同 「……！！」

相本 「……うそだ」

信一郎 「うそじゃない。俺は親父を殺したアメリカが憎い。だから野球なんか大嫌いだ」

相本 「ウソだ！……思い出してくれ、兄貴」

相本、ベースボールのサインボールを突き出す。

信一郎 「……お前、そんなものをまだ」

相本 「持つてるに決まってるだろ、兄貴が形見だといってくれたボールだ、持つてるに決まってるじゃないか。このボールは、今でも俺の宝物なんだ」

信一郎 「芳彦……」

相本 「思い出せ兄貴、十年前、後樂園球場でこのボールをもらった日のことを。親父と一緒に日米野球大会を観に行ったんだろ？そこで憧れのベースボールにサインしてもらったんだろ？握手してもらったら、嬉しくて泣いちゃったんだろ？ウチに帰ってくるなり嬉しそうに教えてくれたじゃないか。『ベースボールはすごかった、さすがアメリカ選抜軍の主将だ。いつかお前もベースボールのような野球選手になれ』って、目を輝かせて言ってくれたじゃないか！」

信一郎 「……」

相本、近づいて、信一郎の手にサインボールを握らせてやる。

そのボールをじっと見つめる信一郎……。

信一郎 「芳彦……」

相本 「見届けてくれ、……俺の、最後の試合を」

信一郎 「……わかった」

土下座していた一同、ハッと顔を見合わせる。

笠井 「ありがとうございます！」

一同 「ありがとうございます……！」

○ 慶応大学のグラウンド

並んで素振りしている阪下、別府、山川、田所。

別府 「ふと手を止めて」阪下、来るよな、あいっら」

阪下 「大丈夫だ、必ず来る、早稲田の意地に賭けてもな」

そんな二人の背後に、相本が現れる。

別府 「先に気付いて」相本……」

相本 「(笑顔で) 待たせたな」

別府 「ほな……(許可が下りたのか?)」

相本 「大学の許可はまだ得られない」

別府 「ええ?」

相本 「だが、確実に認めざるを得ない手は打った」

阪下 「どんな手だ?」

相本 「明日、楽しみにしてろ」

笑顔を残し、去ろうとするが、

別府 「相本!」

相本 「?」

別府 「ずっと、お前に言いたかったことがある」

相本 「なんだ、改まって。らしくないな」

別府 「……二年前のことだ」

相本 「……」

別府 「お前は、俺のせいで……、本当にすまなかった! (深々と頭を下げる)」

相本 「気にするな、お互い全力プレイをした上での事故だ。しかも悪いのは打ったお前じゃなく、打球を避け切れなかった俺の方だ。それに、たとえ野球ができなくなっても、俺が早稲田野球部の一員であることになんら変わりはない。くだらんことは忘れて、明日の試合に集中しろ」

別府 「……ありがとう、相本」

そこに、那須野が校歌を熱唱しながら現れる。

那須野 「♪都の西北早稲田の森にく♪」

阪下 「おい那須野、慶応のグラウンドで早稲田の校歌をとはいいい度胸だな」

那須野 「先制パンチってやつだ!最後の試合、野球はもちろん、応援合戦も早稲田が圧勝させてもらうからな!」

別府 「俺な、前から一つ聞きたいことがあったんやけど、早稲田の応援団って、なん

でいっつもお前一人なん?」

阪下 「なるほど、そう言われてみたら確かにその通りだな」

相本 「なんでなんだ?」

那須野 「……すごいことを聞くな、お前達は」

別府 「頼む、教えてくれ」

那須野 「それはだな……、早稲田の応援団は、常に試合開始を持って結成され、試合終了と共に解散する。つまり、試合中早稲田のスタンドにいる全員が早稲田の応援団というわけだ」

別府 「……ほなお前いらんやん」

那須野 「ドキッ！」

阪下 「なるほど」

相本 「確かにその通りだな」

那須野 「おい相本、お前までそれはないだろう」

みんなが笑う。

暗転。

ワセダ 「その頃戸塚球場では、早稲田の選手たちが、手に手にトンボや箒を持ち、グラウンドの隅々を掃き清めていた。明日、好敵手慶応に、気持ちよくグラウンドに入ってもらおう為の心配りである」

早稲田野球部の全員が、真剣に掃除をしている。

そこに、笠井、近松、相本が、野球用具の積まれたリヤカーを押してくる。

笠井 「みんな、ちょっと集まってくれ」

「はい！」と一同が集合する。

金本 「なんですか、これ」

壺谷 「わかった、いつか相本さんが買い集めてくださった道具ですね？」

相本 「ボールは300ダース。クラブもミットも、もちろんバットも十分にある」

「うわあ、すごい」「新品だ」と歓声を上げて用具を手取る下級生たち。

笠井 「金本、壺谷、これをお前ら一年生に預ける」

一同 「？」

金本 「預けるって、どういうことですか？」

近松 「もしも俺たちが生きて帰って来れなかった時は、お前らの責任で管理してくれ」

金本・壺谷 「！」

相本 「早稲田の野球を頼んだぞ」

近松 「明日の試合が終わったら、俺たちは早稲田の野球道を守る為に行って来る」

突然にこみ上げて泣き出す金本、壺谷。岡島や伴東も。

笠井 「バカ野郎、泣く奴があるか！晴れの門出じゃないか」

近松 「泣くのは明日の試合が終わってからだ」

壺谷 「はい！」

金本 「(泣きながら) すいません！」

笠井 「さあ、引継ぎも終わったぞ、これで心置きなく旅立てる」

相本 「掃除の続きをやってしまおう。世話になったグラウンドに感謝の気持ちを込めて

「な  
一同 「はい！」

また、掃除を始める早稲田ナイン。  
暗転。

ワセダ 「そして翌日、運命の昭和18年10月26日がやってきた」

○陸軍・児島大佐の部屋

毎朝新聞を読んでいる児島大佐の手が震えている。  
「失礼します！」と入ってきた荒木田が気付いて、

荒木田 「大佐、どうされました？」

児島大佐 「読んでみる！（新聞を突き出す）」

荒木田 「(受け取り音読して) 昨日、上野動物園のゾウの花子が」

児島大佐 「そこじゃない！」

荒木田 「すみません(読み直し) 本日、早慶両校では、往く学徒のために、出陣選手の  
行を壮んにする為、早稲田大学戸塚球場において、出陣学徒壮行早慶野球戦を  
実行することになった」

児島大佐 「すぐに戸塚警察に電話して試合を中止させろ！」

荒木田 「しかし、警察に試合を中止する権限など……」

児島大佐 「いいから電話しろ！」

荒木田 「ハッ！（部屋を飛び出していく）」

児島大佐 「……つたく、非国民どもめ……(とイラついて歩き回るが、ふと新聞を見つ  
め) ゾウの花子がどうしたって？」

新聞を開き、その記事を読みながら、思わず泣き出す。

児島大佐 「花子……ついに死んじゃったのか、……かわいそうに……花子オー」

暗転。

○戸塚球場

重箱を抱えた伴東の周りを、早稲田ナインと那須野が取り囲み、それぞれ  
おほぎを食べている。

伴東 「さあさあ、皆さん、遠慮はせんとどんどん食べてくださいね」

近松 「そう言いながら、さつきから一番食べてるのは貴様じゃないか」

伴東 「あ、バレました？だって、久しぶりのお袋の味ですもん」

笠井 「今度は、あんこくれ」

岡島 「俺は、ごまを頼む」

相本 「しかしありがたいな、砂糖の配給もろくないのに、お袋さん、相当苦労して  
下さったんだろな」

笠井 「みんな、伴東のお袋様に感謝して、しっかり噛みしめて食えよ」  
一同 「はい！」

那須野 「これでしっかりスタミナもついたし、今日は思い切り頑張るぞ！」

近松 「那須野、お前が野球をやるわけじゃないんだから、そんなにスタミナつけなくてもいいだろう」

那須野 「そう言うなよ、甘い物には目がないんだ」

そこに、血相を変えた阪下と別府が駆けつける。

阪下 「おい、大変だ！」

近松 「どうした、慶応の誰かが、早稲田に恐れをなして敵前逃亡でもしたか」

別府 「冗談言ってる場合と違うぞ」

阪下 「軍部から圧力がかかって戸塚警察署が動き、この早慶戦の責任者に出頭命令が出た」

別府 「この試合の責任者は、今すぐ戸塚署に出頭せえいうこっちゃ」

笠井 「なんだって!？」

近松 「どうする、相本」

相本 「……仕方がない、俺が行こう」

那須野 「待て相本、お前は早稲田野球部にいなきやならない存在だ」

相本 「しかし、誰かが行かなきゃ、万が一開始前に中止命令でも出されたら」

那須野 「俺が行く」

一同 「ええ!？」

那須野 「俺に任せる。ばっちり時間稼ぎしてくるよ。そのうちに試合が始まれば、もう中止しろとは言えなくなるだろ」

別府 「那須野……、お前、実はけっこうええ奴だったんや」

那須野 「実とは何だ!……その代わり、どっちも正々堂々、思う存分戦ってくれよ」

相本 「……ありがとう、那須野。恩に着る」

みんなが口々に「頼んだぞ」「よろしくお願いします」と送る。

那須野、笑顔を残して歩き出すと、振り返り、

那須野 「フレ、フレ、わ、せ、だー!フレ、フレ、け、い、おー」

出頭していく那須野に、ブラスバンドが早稲田の校歌を演奏して送り出す。  
その校歌と共に、飛島先生が現れる。

笠井 「集合！」

早稲田の選手が飛島の前に整列する。

飛島先生「慶応の選手も呼びなさい」

笠井のアイコンタクトを受けた阪下も「集合」と声をかけ、両軍の選手が飛島を取り囲んだ。

飛島先生「まずは晴れの日を迎えた諸君らに、おめでどうと言いたい。そして、その胸に、今この瞬間を刻み込んでもらいたい。たとえどんな弾圧を受けても、軍や文部省が野球を撲滅しようとしても、我らの野球魂までが奪われることはない。やがて戦争が終われば、我々は高らかに復活の鐘を鳴らし、もう一度このグラウンドに集まって、我らの野球を再び誕生させようじゃないか。今日の試合は、その誓いの試合だ。みんな正々堂々、最後まで全力で戦ってくれ」

全員「はい！」

飛島先生「両チームの健闘を祈る！」

全員「ありがとうございます！」

阪下「飛島先生の言葉を胸に、最後のミーティングだ」

慶応選手「はい！」

飛島先生が去り、慶応もベンチに向かう。

笠井「相本、最後にお前からも一言頼む」

相本「いや、キャプテンはお前なんだから」

笠井「お前の存在なくしては、この試合の実現はなかった。最後は是非お前に頼みたい」

近松「その通りだ。俺たちはお前のお陰で思い残すことなく戦地に行けるんだ」

早稲田の全員が、同じ気持ちで相本を見つめている。

相本「礼を云うのは俺のほうだ。肩に打球を受けて野球ができなくなって、正直一度は自棄になった。だけどみんなのお陰でここまで一緒に野球を続けることができた。たとえボールは投げられなくても、バットを振ることができなくても、俺の心はいつまでもお前らと一緒だ。俺は忘れない。みんなのことを。早稲田の野球、一球入魂の精神を。今日は最後の最後まで、精一杯俺たちの野球をやる」

一同「おお！」「はー！」

相本を中心に、みんなが円陣を組む。

伴東「あの、最後の最後に、一つ言っただけいいですか？」

笠井「なんだ、伴東、早く言え」

伴東、せわしなく顔をハンカチで拭きまくる。

近松「何をしているんだ」

伴東「ハンケチです」

岡島「ハンケチがどうしたんだ？」

伴東「いや、これもまた単なる俺の勘なんですけどね、今から65年ぐらい先の早稲田で、このハンケチが大流行するじゃないかなって」

笠井「また訳のわからんことを言い出した」

近松「ハンケチが、大流行？どういうことだ」

伴東「ですからね、試合中ハンケチで何度も顔を拭くと、オナゴにモテるといふか、

近松 「ハンケチ王子！なんて呼ばれて有名になれるんじゃないかと……」

伴東 「いや、これはあくまでも勘ですよ。未来のことは誰にも判りません」

笠井 「もういい、お前のデータラメな未来話に付き合ってる場合じゃない」

伴東 「……すんまつしえん」

相本 「だけど伴東のいうように、65年後も、俺たちの後輩たちが力いっぱい野球ができる時代になつてるといいな」

笠井 「できるさ。お前のいうように、その頃には日本人とアメリカ人が、同じユニフォームを着て、一つのグラウンドで一つのボールを追いかける時代にきつとなつてる」

一同、しみじみと笠井の手の中にあるボールを見つめる。

近松 「さあ、行こう、慶応が待ってるぞ。相本」

相本 「ああ」

一同、改めて円陣を組みなおし、

相本 「早稲田、ファイツ」

一同 「オーツ！」

選手たちがグラウンドに散っていく。

眩しく見送った相本の元に、松葉杖の信一郎が近づいてくる。

『カチューシャの唄』カットイン。

相本 「兄貴……来てくれたのか！」

信一郎 「……」

信一郎、サインボールを差し出す。

信一郎 「お前が持つてる、もうお前のものだ」

相本 「……ありがとう」

ボールを手渡ししつつ、手と手が触れ合う。

そのまま固い握手を交わす兄弟。

信一郎 「……がんばれよ、俺と、親父の分まで」

相本 「……ああ」

ボールを握り締め、駆け去っていく相本。

試合開始のサイレンが終わり、『海ゆかば』（インスト）が流れ出す。

ワセダ「そして、最後の早慶戦が始まった。試合中、両校の選手たちは懸命にプレーし、応援団は力の限り校歌を歌った。舞台は神宮ではなかったが、最高の雰囲気だった。誰もがこんな時期に早慶戦ができたという喜びと、来るべき出陣の悲壮

感が重なって、万感胸に迫るものがあつたのだろう。戸塚球場は、全く一つの大きな感動の塊となって、素晴らしい一体感に包まれていた。

結果は、10対1で早稲田の大勝に終わった。慶応は大敗したが、その結果にこだわった者は一人もいなかった。試合が終わると早稲田のスタンドから、「ガンバレ慶応」のコールが送られ、すぐさま慶応側からも、「ガンバレ早稲田」の声が起こった。きちんと整列して応援団に頭を下げた選手の顔は、どの顔も、汗と、泥と、涙にまみれていた。もう早稲田も慶応もなかった。明日は学徒として出陣して行く仲間として、互いに励ましあう気持ちだが、球場全体に漲っていた。やがて全ての選手と応援団は肩を組み、心を一つにして歌を歌い始めた」

並んで肩を組み、『海ゆかば』を大声で歌い出す早慶両選手たち。

球場全体の大合唱となっていく。

ワセダ「それから5日後、選手達は出陣学徒壮行会に出席、その後、次々と戦地に旅立って行った」

※以下、順番は仮で、

山川にスポットが当たる。

ワセダ「慶応大学・山川昭光、海軍に入隊後、レイテ沖海戦に出撃し、フィリピン沖で戦死」

壺谷にスポットが当たる。

ワセダ「早稲田大学・壺谷健一、鹿児島知覧基地から特攻し、沖縄洋上で戦死」

田所にスポットが当たる。

ワセダ「慶応大学・田所富士夫、陸軍航空隊に配属となり、台湾沖に出撃し、戦死」

岡島にスポットが当たる。

ワセダ「早稲田大学・岡島忠之、戦後大学に復学し、主将として早稲田を優勝に導くも、その翌年、肺病が再発し、死亡」

阪下にスポットが当たる。

ワセダ「慶応大学・阪下誠司、満州に出兵し終戦を迎えるがソ連軍に拘束され、モスクワ郊外の収容所に入れられるが、帰国後は慶応野球部監督に就任」

笠井にスポットが当たる。

ワセダ「早稲田大学・笠井和夫、特攻隊要員として赴任するが、出撃前に終戦を迎え、戦後はプロ野球南海ホークスで活躍」

近松にスポットが当たる。

ワセダ「早稲田大学・近松清一、『笠井、相本、先に行く』との遺書を残し、沖縄から特攻して戦死」

金本にスポットが当たる。

ワセダ「早稲田大学・金本明夫、本名…金永祚（キムヨンジョ）。最後の早慶戦後、兵役

を逃れる為に退部、プロ野球の朝日で活躍するが、東京大空襲を機に韓国に引き上げ、韓国野球界の指導者となる」

伴東にスポットが当たる。

ワセダ「早稲田大学・伴東勇介、戦後、プロ野球の西鉄に入り活躍、その後国土舘大学野球部監督に就任」

別府にスポットが当たる。

ワセダ「慶応大学・別府豊、終戦後、プロ野球選手となり、阪神タイガースなどで活躍」

相本にスポットライトが当たる。

ワセダ「早稲田大学・相本芳彦、戦後大学に復学し、早稲田野球部史上、最初で最後の学生監督に就任」

『海ゆかば』がフェイドアウトし、暗転。

ワセダ「その日から65年、彼らが青春の全てを賭けて、燃やし続けた学生野球の灯は、今も神宮球場で熱く熱く、燃え続けている」

どこからともなく、コンバットマーチが聞こえてくる。

学生たちの大歓声も聞こえてきて、

両軍ベンチ前に、早稲田・慶応の選手たち。

「早稲田、ファイッ！」

「オーッ！」

ベンチから勢いよく飛び出してくる現在の早慶両軍選手が整列する。

その中にワセダとケイオーの姿もある。

ケイオー「ワセダ、生きてるっていいな」

ワセダ「はい！ケイオーさん、人生って素晴らしいですね！」

ワセダとケイオーは、新しい人生を生きなおしたのだ。

審判の声「プレイボール！」

試合開始のサイレンが高々と鳴って、

音楽、カットイン。

○カーテンコール

幕――。